doi：10. 20776/S13482084-71-P53
千葉大学教育学部研究紀要　第71巻　53～60頁（2023）

中学校家庭科保育学習における乳幼児来校型のふれ合い体験の試み

シェイファー実緒[1)]・中山節子[2)]*・安藤　藍[2)]
[1)]千葉大学附属中学校
[2)]千葉大学・教育学部

A Study of School based Interactive Learning Experience with Young Children in a Junior High School Home Economics Childcare Learning

SCHAEFER Mio[1)], NAKAYAMA Setsuko[2)]* and ANDO Ai[2)]
[1)]Attached Junior High School of Faculty of Education, Chiba University
[2)]Faculty of Education, Chiba University, Japan

家庭科保育学習におけるふれ合い体験は，幼稚園・保育所等などの機関に生徒が訪問する活動を主流として実施されてきた。新型コロナ感染症拡大によって，家庭科がこれまで重視してきた実践的・体験的な学習活動を従来の方法で実施することは難しくなった。訪問型ふれ合い体験が困難な状況下において，学びをいかに保障するか検討が求められている。本研究は，ウィズコロナにおける中学校来校型ふれ合い体験学習を実施し，その意義と課題について考察することを目的とする。家庭科の保育学習として，来校型ふれ合い体験実習を位置づけ，コロナウイルス対策を講じた安全な実施方法を検討した。分析対象は，保育学習の最後にふれ合い体験を振り返る活動として実施したゲストに宛てた手紙の内容，および教員，協力教員，ゲストからのからのコメントとした。
生徒は不安や戸惑いを見せながらも，最終的にはふれ合い体験を肯定的に捉えた。また，乳幼児とのふれ合い体験の経験から，異世代の人との関わり方について発展的に考察することができた生徒も見られた。

The early childhood education and care experience in Home Economics has been implemented as a mainstream program in which students visit institutions such as kindergartens and daycare centers. Due to COVID-19 pandemic, the practical, hands-on learning activities that Home Economics has emphasized have become difficult to implement using conventional methods. It is necessary to consider how to guarantee the learning of interactive experiences with young children. The purpose of this study is to examine the significance and challenges of implementing a school based interactive learning experience at a junior high school. The analysis was based on the content of letters written to guests as an activity to reflect on the interaction experience and comments from teachers and guests after the activity. The students showed some anxiety and confusion, but they received the interaction experience positively in the end. In addition, some students reflected on how to interact with different generations through the experience of interacting with young children.

キーワード：来校型ふれ合い体験（School based interactive learning experience），保育学習（Childcare learning），中学校（Junior high school）

1．はじめに

家庭科で行われているふれ合い体験学習は，核家族化や少子化の進行により減少している乳幼児に関わる機会を提供し，乳幼児との関わり方を体験的に学ぶものとして重視されている。中学校においては，2008年告示の学習指導要領から「幼児と触れ合うなどの活動」が必須となった。以降，現行の学習指導要領（2017年告示）においても，幼児の発達と特徴・子どもが育つ環境としての家族の役割（A(2)ア（ア)），幼児の遊びの意義・幼児との関わり方を理解し（A(2)ア（イ)），幼児とのよりよい関わり方について考え，工夫すること（A(2)イ）として位置付けられ，幼児の発達や遊びの意義，関わり方を理解した後にふれ合い体験学習を行うというように学習内容がより系統的に明示された。また，学習指導要領解説（2017）には，幼児との関わり方については，「地域の実態に応じて子育て支援などの関係機関や子育てサークルの親子などどの触れ合い」，「教室に幼児を招いての触れ合い」などの具体的な方法が記され，「可能な限り直接的な体験ができるように留意する」とふれ合い体験がより重視されている。

松岡・倉持（2019）が実施した調査では，2016年度に直接的な体験を実施した中学校家庭科担当教員は68.8％であり，実施形態でもっとも多かったのは，幼稚園・保育所等に生徒が訪問する（64.1％）であった。この他の実施形態としては，子育て支援センター・育児サークル等に生徒が訪問する（2.6％），乳幼児を中学校に招いて実施する来校型のふれ合い体験は，幼稚園・保育所等か

*連絡先著者：中山節子　nakayase@faculty.chiba-u.jp

らの訪問（22.2％），子育て支援センター・育児サークル等からの訪問（9.2％）がある。また，伊藤（2007）が千葉市内の中高を対象に行ったふれ合い体験学習の実施調査では，中学校では時間割を変更したり，他教科の教師の付き添い依頼などの学校の協力を得ながら，ある程度の学校において実現できていることが明らかにされている。家庭科保育学習におけるふれ合い体験は，幼稚園・保育所等などの機関に生徒が訪問する活動を主流として実施されてきたが，2020年度以降この状況が一変した。新型コロナ感染症拡大によって，家庭科がこれまで重視してきた実践的・体験的な学習活動を従来の方法で実施することは難しくなり，保育園や幼稚園，子ども園等への訪問は難しい状況となった（全国家庭科教育協会，2021）。ふれ合い体験学習の効果は，幼児理解，自分の成長の確認，生徒の新たな一面の発見がある（新垣ら，2010），幼児への関心が高まり，イメージが良好になる（岡野他，2012）や自尊感情が高まる（叶内・倉持，2014），など多くの先行研究により実証されており，中学校家庭科におけるふれ合い体験学習の意義は大きい。訪問型ふれ合い体験が困難な状況下において，学びをいかに保障するか検討が求められている。本研究は，ウィズコロナにおける中学校来校型ふれ合い体験学習を実施し，その意義と課題について考察することを目的とする。

２．研究方法

⑴　対象について

千葉大学教育学部附属中学校３年生４クラス（男76名：女76名）である。常勤の家庭科及び技術の教員が１名ずつ配置されており，今回は保育実習を行うにあたり，前期前半は家庭科教員が担当，前期後半は技術教員が担当し，後期以降は隔週で授業を交互に行うように年間指導計画を組んだ。保育学習の実施時期は５月～６月でふれあい体験の実施は６月である。

⑵　来校型ふれ合い体験実習の方法の検討

中学校家庭科の保育学習の一環として，来校型ふれ合い体験学習を設定した。中学校家庭科で実施した来校型ふれ合い体験学習の先行事例としては，新垣・高木・齋藤（2010）や萬谷・鈴木（2016）がある。新垣・高木・齋藤（2010）は，幼児に限定せず，乳児を学校に招くという方法も取り入れ，生徒が無力な乳児を保護する大人の必要性をより感じたなどの学習効果を見出している。本研究においては，乳幼児を対象としたふれ合い体験学習を設定することとした。萬谷・鈴木（2016）は，訪問型に伴う時間的課題が軽減されるなどの利点を挙げている一方で，幼稚園や保育園における幼児の生活や活動の様子に触れることができない課題を指摘している。来校型で実施するふれ合い体験学習のメリット，デメリットを踏まえ，叶内（2021）の親子来校型のふれ合い体験の環境づくりのリーフレットを参考にし，ふれ合い体験学習の実施方法を検討した。

さらに加えて，新型コロナウイルス感染対策として，手指の消毒，換気の徹底，密集をさけるためのブースの配置と動線などについて検討を行った。千葉県においては，2022年４月より学校教育における児童生徒の貴重な活動機会を確保する観点から，様々な活動を制限するのではなく，段階的に本来の活動を取り戻していく方針が示され，各種の実習は，活動方法を工夫して実施することとなっている。新型コロナウイルス対策を講じた安全な実施方法を計画し，管理職に本研究の趣旨を説明し，実施の許可を得た。

⑶　分析方法

倉持（2022）は，ふれ合い体験学習において，①体験しながら自分との関わりについてメタ的に捉えることは困難であること，②ふれ合い体験をきっかけに育児の困難さに気づき，家庭＝母親だけが育児をする状況ではないことに気が付くことが必要，③家族に自己責任を強いるような学びになっていないか再考が必要であることの３つの重要な点を挙げている。本研究では，倉持（2022）の指摘する①に着目し，第８時「ふれ合い体験を振り返ろう」で実施した協力してくださった方へ生徒が書いた御礼のお手紙を分析対象とした。ふれ合い体験に来てくださった保護者宛てに手紙を書く作業は，ふれ合い体験から時間を置いて行われており，ふれ合い体験をより客観的に振り返ることができ，保護者宛ての手紙の中に自分にとっての体験の意味が表出されることも期待される。すなわち，保護者への手紙というツールを用いることで，このふれ合い学習の意味を自分なりに解釈し，自分との関わりをメタ的に捉えることができるのではないかと考えた。生徒の手紙から生徒自身の気持ちや考え方の変化の描写に着眼して内容を抽出し，その内容についてケース事例分析を行った。

また，ふれ合い学習後に授業者，協力教員，ゲストの保護者からふれ合い学習について寄せて頂いたコメントからふれ合い体験の意義と課題ににについて分析を行った。

３．授業実践の内容

⑴　全体の指導計画と授業の概要

幼児とのふれ合い体験学習を含む全体指導計画の概要は表１のとおりである。第１時は，幼児の心身の発達について考え，授業後にはさらに幼児の理解を深められるように，また生徒自身の親や子育て中の教員に対してインタビューを行う宿題をだした。第２時，遊びの必要性について生徒自身の体験から理解を深め，次回の授業で行うおもちゃ作りについて班員と話し合った。第３時～第５時では班員と協力しておもちゃ作りを行った。各クラスの班ごとに製作したおもちゃは，ダンボールや空き箱，空きペットボトルを主な材料とし，その他画用紙やフェルトを用いている（表２）。おもちゃを作成する前に出来上がったおもちゃに偏りが出ないよう，絵本や音のなる受容遊び，おままごとなどの模倣遊び，積み木などの構成遊びの３つに分かれて作成を行った。おもちゃ製作の前に乳幼児の心身の発達について学習したものの，当日来校された乳幼児の発達段階にすべてのおもちゃが適切であったとはいえなかった。しかしながら，ダンボールを使って冷蔵庫やその中にいれる食材を作成し，お買い物をしたり，料理をするといったおままごとを想定し

表１　幼児とのふれ合い学習の概要

時	学習項目	指導内容
第１時	幼児の心身の発育について，発達の方向性や順序生とともに個人差があることを理解する	学習目標「幼児の心身の発達について考えよう」 ①幼児の体と心の発達について ②幼児の発達と個人差 ③発達の特徴 ④発達を支えるもの
宿題	インタビューを通して幼児への理解を深める	インタビュー項目については各自で決定し，自身の親や子育て中の教員など次回の授業までにインタビューを進める。
第２時	自分自身の実践的・体験的な活動を通して幼児にとっての遊びの意義を理解する	学習目標「遊びの必要性を考えよう」 ①子どものころに夢中になった遊び ②遊びで育つ力にはどんなことがあるだろう ③手作りおもちゃを考えよう
第3-5時	班員と協力して手作りおもちゃを作成する	学習目標「手作りおもちゃ作成」 各班で検討したおもちゃについて作成する
第６時	乳幼児の発達や生活の特徴から，幼児とふれ合うための自分の課題を見つける	学習目標「おもちゃの安全点検・乳幼児とのかかわり方を考える」 ①実際に幼児が遊ぶことを想定して安全確認を行う ②ふれ合い体験においての自分の課題をもつ
第７時	自分の課題にそって，幼児とふれ合う具体的なかかわり方を考え，工夫する	学習目標「乳幼児とふれ合ってみよう」 ①作成したおもちゃを通して乳幼児と関わる ②ベビーカー，抱っこ紐体験（赤ちゃん人形） ③おむつ替え，お着替え体験（赤ちゃん人形）
第８時	乳幼児とのかかわり方について感じたことや考えたことを話し合い，幼児への理解をふかめる	学習目標「ふれ合い体験を振り返ろう」 ①当日の写真をみて体験活動を振り返る ②協力してくださった方へのお礼の手紙作成

表２　ふれ合い学習に向けてクラス別各班で製作したおもちゃ

	A組	B組	C組	D組
１班	おままごと冷蔵庫	ボールコースター	宅急便屋さん （のりもの）	とめぐ一家 （仕掛け布）
２班	わくわくボックス （型はめパズル，ひも通し等）	もぐもぐタイム （果物さいころ）	段ボールギター	的あてボール
３班	しかけ布絵本	お散歩カー	紙コップカルタ	ぺたぺたフルーツ
４班	つみかさねbox	スロットゲーム	魚つり	つみき
５班	びりびりフェルト	パペット人形	パズルキューブ	がちゃぽん
６班	布絵本	窓からこんにちは （布絵本）	リンゴの木をつくろう （布絵本）	わにわにパニック
７班	ころころマシーン （ビーズコースター）	タングラムパズル	しかけ積み木	手押し車
８班	しゃかしゃかボーリング	型はめパズル	魚釣り	ダンボールカー
９班	ゴーストバスターズ(ボーリング)	パズル	ボールコースター	ファッションショー（パズル）

た製作していた班は，８か月の乳幼児に対しては，「りんごは赤いよ」「ころころ転がるね」など製作したおもちゃの当初想定していた遊び方ではなく，乳幼児に合わせて遊びを変化させて交流する姿もみられた。第６時は，乳幼児との関わりにおける安全確認とふれ合い体験での自分の課題を確認した。第７時に乳幼児ふれ合い学習，第８時にふれ合い体験学習の振り返りという流れである。

⑵　乳幼児とのふれ合い学習（第７時）の概要

１）ねらい

体験学習では以下２点の学習目標を設定した。

・日常生活の中で，乳幼児に接する機会の少ない生徒に，乳幼児観察をさせることによって，乳幼児への関心を高めさせる。
・乳幼児の観察を通して，乳幼児の心身の発達や成長，遊びの意義についての理解を深めさせる。

２）授業の展開

表３に授業の展開について示す。新型コロナウイルス感染対策として手指の消毒，乳幼児怪我防止のためにシール名札の着用を徹底し授業を行った。今回は短時間でより多くの乳幼児と交流がもてるよう，あらかじめ交流する乳幼児と時間を指定し，スクリーンで随時確認で

きるようにし，10分ごとに交流場所を移動し，活動を行った。乳幼児の人数の都合上，時間によっては交流できない班があるため，赤ちゃん人形を用いた体験コーナーを設け，体験コーナーでは子育て経験のある教員に協力を仰ぎ，サポートをしていただいた。赤ちゃん人形のほかに，ベビーカー，抱っこ紐，おむつ，着替えを準備し，ベビーカーでは移動の困難さや，荷物を持っている際の危険性についての体験，抱っこ紐では使用する際の注意事項やサポートの仕方などを中心に実践した。おむつ替え，着替えの仕方などの体験についても自由に体験できるように設置した。乳幼児及び保護者の負担を考えて１日で４クラスの体験学習を実施するため，１時間に２クラス同時展開で行った。

また，授業の実施場所は，校内で十分なスペースと換気が可能な学習環境を確保できる部屋を選定した。部屋の中のレイアウトは図１に示す通りである。隣接する部屋には，ゲストの赤ちゃんのおむつ替えスペース等を準備した。

乳幼児の保護者の方には事前にいつでも入退出自由であること，生徒から質問があった際には可能であれば回答していただきたいことを伝えた。

３）体験学習に向けての事前準備

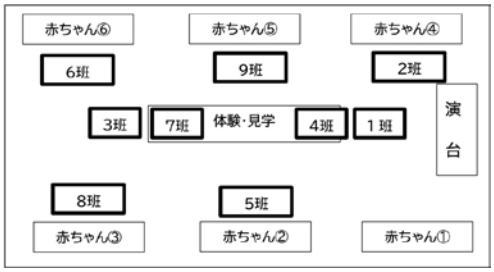
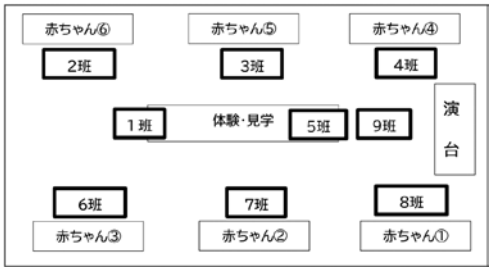
①　ゲストの募集

新型コロナウイルス感染対策と安全を講じた環境を整備し，体験学習の計画をしたが，ゲストの募集は容易ではないことが予想された。そこで，まずは学校内の環境や状況をよく知る校内の教員に協力を仰ぐこととし，４名の乳幼児をもつ教員の理解と協力を頂くことができた。また，外部より２名の方の協力を得ることができた。また，外部の方については，授業実践者と校内で協力を申し出ていただいた教員が直接声をかけ，参加していただける運びとなった。

②　コロナ対応を考慮した安全，衛生を考慮した室内環境づくり

校内で空調設備のある一番大きな教室（大研修室）を

表３　幼児とのふれ合い学習

時配	学習活動	留意点（○）および評価（◇）
5	あいさつ 説明を聞く	○乳幼児の保護者の方には，お子さんの様子次第でいつでも入退出できることを伝える ○入室前消毒，シール名札の着用の確認 ○授業開始時刻に各班が指定された場所ですぐに開始できるようにスクリーンに表示しておく
10	体験活動開始 10分ごとに場所を移動し体験を行う  ふれ合い体験では，作成したおもちゃを通して乳幼児と工夫して関わる 体験・見学では，赤ちゃん人形を用いてベビーカー，抱っこ紐をもちいてのヒヤリハット体験，おむつ替え・お着替え体験を実施	○スムーズに移動ができるようにスクリーンに表示する ○乳幼児との交流体験の少ない生徒も多いため，保護者の方に事前にお伝えする ○他教科の職員に協力を仰ぐ ◇乳幼児に応じたかかわり方について理解しているとともに，適切にできる（知・技） ◇幼児とのよりよいかかわり方について考え，工夫している（思・判・表） ◇幼児とのよりよいかかわり方を考え，課題の解決に主体的に取り組んでいる（主）
30	移動，体験  上記のように４回，10分おきに移動を行う	
5	あいさつ	○体験時間を確保するため，お礼のあいさつは後日お礼の手紙と代えさせていただく ○忘れ物のないように速やかに退出する

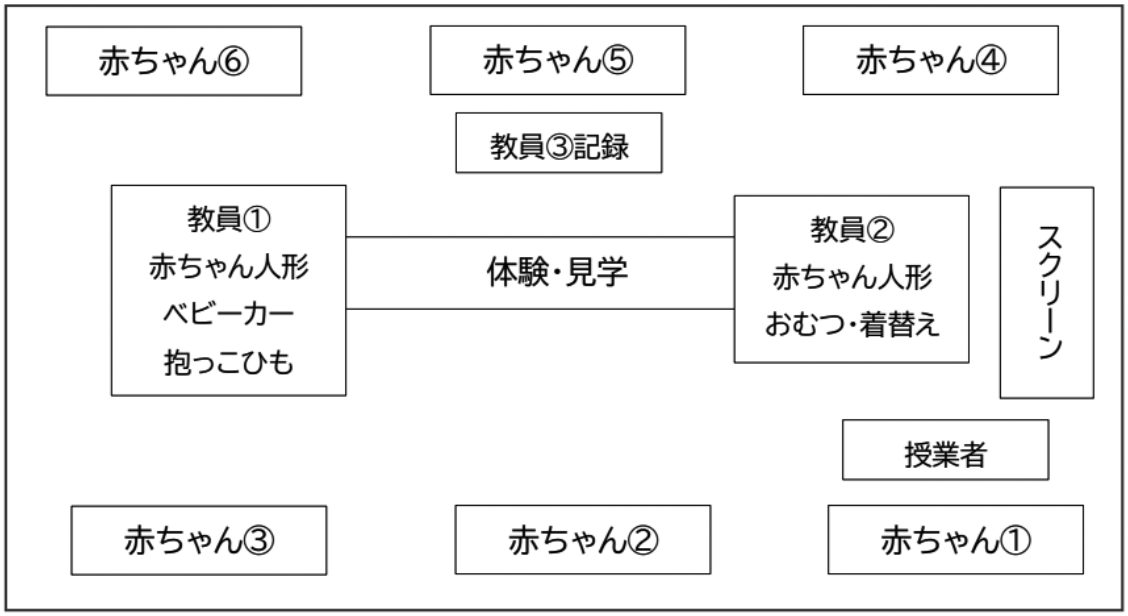


図１　大研修室レイアウト

利用し，快適な室温に調整すること，窓をあけ換気をよくすること，教室入室前の手指の消毒，マスク着用を徹底した。また，乳幼児が活動するスペースにはクッションフロアを設置し，安全に活動が行えるように配慮した。おむつ替えスペースとして別部屋に休憩室を設け，ゲストの方が自由に使用できるようにした。おむつ替えスペースにはおむつ替えマット，おしりふき，赤ちゃん用お菓子，飲み物を準備した。

③　不足備品の調達

千葉市教育委員会から赤ちゃん人形４体の借用，千葉大学教育学部家庭科教育講座から赤ちゃん人形２体，着替えの借用，ベビーカー・抱っこ紐は授業者私物を使用した。

④　教員の協力体制

実習前に授業の趣旨を説明し，教員の協力を仰いだ。常時３名以上の教員の協力を得ることができ，１名は記録のための写真撮影，２名は体験コーナーでの生徒のサポートをお願いした。この他に大学からボランティア学生２名（学部２年生）の派遣をお願いした。

４．結　　果

⑴　中学校における来校型ふれ合い体験学習の意味づけ

生徒の体験の捉え方の変化に着目して抽出した記述内容を類型化した。この類型化によって示されたモデルが，他の事例にも典型的に現れているかどうかを検討し，類型化されたモデルの一般化を試みた。２名の複数の著者によって分析を行った。以下類型化されたモデルごとに結果を示す。

１）不安・戸惑いから肯定的捉えへの変化

ふれ合い体験の学習前や学習開始時では，「接し方に慣れていなくて不安（T27)」，「ほとんど赤ちゃんとふれ合ったことがなく，どう接すればよいか分からない（Y33)」，「赤ちゃんと関わるのは初めてで，なかなか上手くいかなかった（Ｙ４）」など，不安や戸惑いの記述が多く出現している。しかし，その気持ちは，「保護者の方から遊び方のコツを教えてもらい，赤ちゃんとの関わり方を学べた（Y25)」，「小さい子と関わる時あまりコミュニケーションが取れず気持ちが読み取れないと思っていたが，表情で気持ちを感じ取ることができた（Ｙ６）」など乳幼児の理解を深めるきっかけを掴むことで，「関わっていく中で段々と心が通じ合っていき楽しかった（Ｙ８）」，「子育ての大変さを頑張ることができるほど赤ちゃんたちの可愛さを改めて知った（T27)」など乳幼児と関わることの嬉しさや楽しさという肯定的な捉えに変化している。このような不安・戸惑いから肯定的な捉え方への変化が多くの生徒の手紙に現れていた背景のひとつには，「保護者の方が声かけをしているのを見て，こんな風に声かけをすればいいのかと参考になった（M15)」等，当該乳幼児を理解する者の声かけによる体験的・即応的な学びが生徒の自信につながったことが考えられる。

２）乳幼児や子育ての新たな一面の発見

乳幼児との関わりに対する肯定的な捉えの記述には，乳幼児の発想の柔軟さに言及するものも複数見受けられた。とくに，事前に作成したおもちゃで想定とは異なる遊び方をする乳幼児に，新鮮な発見をしていた。たとえば，「赤ちゃんは色々な遊び方をして，たくさんのことを考えている（Ke27)」，「赤ちゃんたちはオリジナルの遊び方を見つけ出し，遊ぶ中で自ら『発見』していた（Ka4)」，「自分達（が製作したおもちゃの）遊び方ではない方法で遊んでいて驚いた。赤ちゃんは色々な考え方ができると思った（T12)」などがこれにあたる。こうした乳幼児の柔軟さは，想定していた乳幼児イメージとの差や中学生である自己と比して認識，発見されていたようだ。生徒によってはさらに「赤ちゃんは素晴らしい。自分も昔そうだったと思うととても信じられない（Ke27)」といった振り返りや，「できないことが多いからこそ考えられ

るものがあることに気づかされた（Ｙ２）」とメタ的な気づきにつながった生徒もあった。

３）自己の思考・行動変容

ふれ合い体験を通して，生徒は乳幼児や子育ての肯定的側面だけでなく，大変さやうまくいかない側面にも気が付くことになる。「小さな赤ちゃんを一から育てる（親の）偉大さに感動した（Y15)」「Ｍちゃんの様子やお母さんの大変さを聞いて，私も幼児の時はこんな風に母に支えてもらったんだと思い，感謝の気持ちを感じた（M18)」といったような，保護者一般や自らの親に対する見方の変化がみてとれる記述もあった。一方，もとから子どもに関わる将来の夢がある生徒は，「将来助産師になりたいと思っている。私の周りには赤ちゃんがいるが，その子たちとはまた違って良い経験となった（T11)」，「私の将来の夢は乳幼児関連の職業に就くことだが，なりたい気持ちが一層高まった（T26)」と綴っている。親や将来の職業への自己の思考を深める体験であったことがうかがえた。ただし，考察するには資料が十分でないため今後の課題になるが，来校可能な保護者が育休中の母親だったことで，女子生徒を中心に親や母親に対する思考深化が語られた可能性もある。

くわえて，ふれ合い体験をきっかけに行動レベルの変容につながる記述もみられた。たとえば「色々な年齢，立場の違う人たちとの接し方を考えていこうと思う（Y29)」，「些細なことだが，育児で困っている人を見かけたらお手伝いしようと思えた（Ｋ８）」，「妹がいるので，学んだことを生活に生かしていきたい（Y20)」等がそうである。

⑵　中学校における来校型ふれ合い体験学習の意義と課題

１）授業者及び協力教員から見る意義と課題

例年であれば地域の保育園に協力をいただき，生徒が製作したおもちゃを持参して２時間の実習時間を確保して行っていた授業内容であるが，今年度は新型コロナウイルスの感染予防対策として保育園の協力を要請することは難しく，校内での来校型ふれ合い体験へと変更を行った。様々な規制のある中だったが，ふれ合い体験の意義やねらいに賛同し協力くださった方々のおかげでなんとか実施することができた。協力者がいなければ実施することは不可能であり，来年度以降の実施が不透明になってしまうことが課題である。地域の子育てサークルなどに協力を依頼するなど，今年度限りの実施にしない方法を模索する必要がある。

また，協力していただいたゲストの年齢が８か月～１歳８か月と低い年齢層に偏った。協力を依頼した際，３歳以降の幼児は保育園や幼稚園に通園していることが多く，協力するにあたり保護者が仕事を休み，子どもも保育園，幼稚園を休むことになるため承諾を得られなかった。結果として育児休業中の方のみ協力が得られた。赤ちゃんゲストの体調や機嫌を考慮する必要もあり，授業計画をどのように設定していくか今後の課題である。

低い年齢層になると，言語によるコミュニケーションが難しいため，生徒もかかわりに苦戦している様子も見られた。事前に参加される乳幼児の年齢層の心身の発達を復習しておくなど，対策する必要がある。しかしながら，生徒はおもちゃ作り当初計画していたような遊び方だけでなく，月齢や乳幼児の興味に合わせて柔軟に対応しようとしている姿が多くみられた。また，体験コーナーを設けたことで赤ちゃんゲストの人数が足りない問題を多少解消することができた。協力教員からは「体験コーナーで人形をだっこするだけでも生徒は嬉しそうな様子だったので，準備は大変かもしれないが大切な機会だと思う」，「体験コーナーで育児経験のある先生が，子育ての大変な点などを語っていた際，一生懸命に話を聞く生徒の姿が印象的だった」，「体験コーナーに育児経験がある方がいるとより話題が膨らむ」など体験コーナーに関するコメントも多かった。

さらに，コロナ禍以前においてもふれ合い体験学習は例年３年生で行ってきたが，授業時数が少なく，準備時間も少ない。充実した体験学習を実施するために，３年間のカリキュラムの位置づけを再考することも課題として挙げられる。

２）来校者の感想にみる意義と課題

ふれ合い体験のために来校して頂いた保護者の方からは，中学生と関わる機会が少なく，また，コロナ禍ということも重なって，これまでたくさんの人のいる場所に行く経験があまりなく，（自分の子が）泣いたりするかなと心配した。しかし，生徒が作ってくれたおもちゃに（自分の子が）興味をもって遊んでくれて，生徒が積極的に関わってくれてよい機会だったと複数のコメントがあった。また，生徒の積極的な姿は，事前の指導が行き届いていることを感じたし，何よりみんな一生懸命で嬉しかったという感想もあった。

環境設備の観点からは，フローリングではなくジョイントマットが敷いてあったり，お手拭き（ウェットティッシュ）があったり，おむつ替えの場所が別に準備されていて，助かったといった意見が挙がった。

課題としては，「１つのグループが10分だったので，慣れてきたころに移動になったのは少し寂しかった」など時間が短いという意見がある一方で，「乳幼児だと１時間が機嫌の限界だと感じた。２時間は長い。」など，月齢や年齢，乳幼児の特性など個体差もあり，時間設定については今後の課題として挙げられる。

５．総合考察

⑴　来校型ふれ合い体験の意義と課題

本研究では，コロナ禍において訪問型のふれ合い体験の実施が困難となっている中，コロナ感染対策を講じた来校型のふれ合い体験を検討し，来校型ふれ合い体験を中心とした保育学習を実施した。日常生活の中で，幼児に接する機会の少ない生徒に，幼児観察をさせることによって，幼児への関心を高めさせること，幼児の観察を通して，幼児の心身の発達や成長，遊びの意義についての理解を深めさせることをねらいとして授業計画，実習内容の工夫を行った。

協力していただいた赤ちゃんは乳児が多く，中学生に

とっては関わりが難しかったかもしれない。学習指導要領では，中学校の保育の学習の対象は幼児であり，乳児までを対象とするのは高等学校の学習として扱っている。ふれ合い体験前の保育学習では，乳児については十分な学習はしていなかったために，どのように接してよいかわからず，戸惑いを見せる生徒もいた。しかし，保護者の乳児へ接し方を観察したり，接し方を教えてもらったりしながら，乳児と適切に関わるコツを獲得しながら，最終的にはふれ合い体験を肯定的に捉えている。また，生徒は乳幼児と上手く関わっている生徒を観察して，自分も同じようにやってみるという学び合いや子育て経験のある協力教員からアドバイスをもらったりする生徒の姿も見られた。

このように積極的に乳幼児と関わろうとする生徒の様子に対して，教師は「生徒がこんなに乳幼児にたいして積極的になれると思わなかった」として，ふれ合い体験は，これまで知らなかった生徒の一面に触れ，新たな視点で生徒を見るきっかけとなっていた。また，ゲストの保護者は「みんな一生懸命で嬉しかった」として，ふれ合い活動を肯定的に捉えていた。これまで試みのない来校型のふれ合い体験の実施やコロナ禍における参加に不安な気持ちがあったのは，生徒だけではなく，教師や保護者も同様である。生徒が乳幼児と積極的に関わろうとする姿を見て，肯定的な見方へ変化したと言える。

このふれ合い体験が中学生の自分にとってどのような意味を持つのか，また，自分の価値観を振り返るような生徒の様子も見られた。保育学習の後に，教師に「赤ちゃんは苦手だったが，自分の成長に多くの人が関わっていたのかも思うと，自分も赤ちゃんとの関わりを大切にしたいと考えるようになった」と話をしてくれた生徒もいた。また，乳幼児とのふれ合い体験の経験から，異世代の人との関わり方について発展的に考察することができた生徒も見られた。

一方で，生徒の中には授業前から乳幼児にネガティブな印象を持っている生徒や「私は内気な性格で赤ちゃんとふれ合うことはあまりなかったが，輪の外から見ているだけでも大きな学びになった」という生徒もいた。個々の状況によって，得た経験や学びの程度は異なっている。叶内・倉持（2015）は，ふれ合い体験を肯定的に捉えていても，実際にふれ合うことは，幼児と一緒にいれば自然に引き出されるのものではなく，知識として獲得する必要があるケアであることを指摘している。特にふれ合い体験後に実施する振り返りの中で，幼児との関わり方や工夫できることについて考察させ，新たな課題設定をさせることが継続性という観点からも重要となる。また，家庭科では幼児だけでなく，家族関係や高齢者や地域の人々との関わりをより良くする方法や工夫について学習する。人との関わり方についての既習事項を関連させながら，幼児との関わりについて取り扱うことが必要である。

⑵　来校型のふれ合い体験について

来校型のふれ合い体験の場合，通常家庭科室や教室は，ふれ合い体験の仕様になっていないため，安全・衛生面を配慮しながら場所の設定，設備の準備，動線を考慮したレイアウト，人手など様々な協力とその体制，運用など事前の準備が必要となる。今回のふれ合い体験の実施場所は，校内で広く，十分な換気ができ，トイレとおむつ替えなどができる部屋が隣接する場所を確保することができ，保護者の方からも「フローリングではなくマットがあったり，お手拭き（ウェットティッシュ）があったり，助かった」との意見を頂いた。概ね叶内（2021）が示す来校型のふれ合い体験時の環境づくりを行うことができたといえる。加えてコロナ感染対策を講じた環境づくりとして留意したのは，学校生活における基本的な感染対策を取った上で，赤ちゃんとのふれ合いの他，複数の体験コーナーを用意し，１つの場所に留まるのは10分程度として，長い時間の接触を避け，生徒数の多い密な状態を解消できるように出来る限り配慮した。協力教員からは，「人形をだっこするだけでも嬉しそうな様子だったので，準備は大変かもしれないが大切な機会だと思う」とあり，体験コーナーは，単にふれ合い体験の補完的な役割として機能しているわけではなく，重要な役割を担っていることが明らかとなった。さらに「体験コーナーで育児経験のある先生が，子育ての大変な点などを語っていた際，一生懸命に話を聞く生徒の姿が印象的だった」などの意見もあり，体験コーナーをどのように運用するかも吟味が必要となる。

来校型ふれ合い体験のメリットとしては，外部へ出る必要がないために，通常の日程で授業を行うことができたことが挙げられる。従来の訪問型のふれ合い体験では，おもちゃを持参して炎天下の中や悪天候の中，15分程度歩いて移動していたが，来校型にしたことで生徒の負担や受け入れ先の負担が大幅に軽減でき，授業時間を全て実習時間に充てることができた。多くの校内の先生方の理解と協力によりふれ合い体験の実施が可能となった。日頃の協力体制づくりを大切にしていきたい。また，多くの先生方にふれ合い体験の意義を体感していただく良い機会であったとも言える。

今後の課題としては，持続可能なふれ合い体験の実施が挙げられる。一つの手立てとして，自治体が展開している地域少子化対策重点推進事業の活用や教育委員会との連携が挙げられる。これらの事業の活用においては，家庭科におけるふれ合い体験の趣旨や授業目標に沿っているかを見極める必要があるが，ふれ合い体験の実施方法やその拠点の選択肢増やし，学校の状況に応じた実施が可能となる環境整備が必要である。

謝　　辞

本研究は令和４年度教育学部―附属学校連携研究の一環で実施されました。実施にあたり，ふれ合い体験学習にご協力くださいました千葉大学附属中学校職員の皆様，ゲストの皆様に心より感謝申し上げます。

引用文献

新垣小矢加，高木直，齋藤弘子．（2010）．山形県における中学校「技術・家庭」保育領域の指導の実際，山形大学教職・教育実践研究，５，27-33.

伊藤葉子．(2007)．中・高校生の家庭科の保育体験学習の教育的課題に関する検討，日本家政学会誌，58⑹，315-326.

叶内茜．(2021)．親子来校型ふれ合い体験時の環境づくり．

叶内茜，倉持清美．(2014)．中学校家庭科のふれ合い体験プログラムによる効果の比較―幼児への肯定的意識・育児への積極性と自尊感情尺度から，日本家政学会誌，65⑵，58-63.

叶内茜，倉持清美．(2015)．中学生における幼児とのかかわり方と心情の関連―幼児とのふれ合いを拒否した生徒の事例に着目して―，日本家庭科教育学会誌，58⑶，164-171.

倉持清美．(2022)．家庭科保育学習の課題，日本家庭科教育学会誌，64⑷，233-243.

松岡晃代，倉持清美．(2019)．幼児触れ合い体験実施推進につながる必要事項の検討―中学校　家庭科教員に対する質問紙調査から―，日本家庭科教育学会誌，62⑴，３-14.

文部科学省．(2017)．中学校学習指導要領（平成29年告示）解説技術・家庭編，開隆堂出版.

岡野雅子，伊藤葉子，倉持清美，金田利子．(2012)．中・高生の家庭科における「幼児とのふれ合い体験」を含む保育学習の効果―幼児への関心・イメージ・知識・共感的応答性の変化とその関連―，日本家庭科教育学会誌，63⑷，175-184.

萬谷恵三子，鈴木敏子．(2016)．「幼児来校型幼児とふれ合う活動」を組み込んだ中学校家庭科の指導計画の作成と授業の構想，日本家庭科教育学会誌，59(1)，35-45.

全国家庭科教育協会．(2021)．緊急調査「コロナ禍での家庭科教育の現状」結果速報.